

大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連 (11)

— メールによる卒業論文の指導に関する効用と限界 —

(教育心理学教室) 佐藤 公代

The Teaching-Learning Process in University Education(11)

— The Effect and Limit on Directing the Graduation Thesis by Mailing —

Kimiyo SATOU

(平成19年6月8日受理)

(問題と目的)

佐藤の「大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連(1)～(10)」の一連の研究から、今回は、メールによる卒業論文の指導に関する効用と限界について考えることにする。IT時代においてメールは欠かせないものであるかも知れないが、指導に関しては果たしてどんな効果をもたらすのであろうか。そんな疑問から、偶然起こった事態を考察してみることにする。

放送大学の客員教員として、6年間の間に5人の卒業論文を指導してきた。その間、1人の人がメールによる指導を要望してきた。初めての経験で、どのようにしたらよいかを考えてみた。相手からの論文を点検し、メールで返信し、そこからまた、やりとりをして仕上げていく。

仮説は以下の通りである。

- (1) 効用よりも限界の方に問題点が多いだろう。
- (2) ニュアンスの限界がみられるであろう。

(方 法)

- 1) 期日：2006年7月～10月
- 2) 対象者：卒業論文(文献研究)を書く人、1人。
- 3) 手続き：5回のメールを分析して、効用と限界を考える資料を取り出す。

(結果と考察)

添付ファイルを使ったことのない学生だったので、メールの送受信が出来るかどうか心配で送られてきたメー

ルに対する返信は、「届きました。卒論原稿もみれました。書き直したものを送って下さればまたみます。無理をなさらないでお励み下さい。」である。問題意識がはっきりしない段階ではじめた研究なので、学生の自主性にまかせ、送られてきた原稿を手直しする形態をとる。

<1>「7月に指導いただいた笑いに条件をつけると結論が出しやすいと言われていたので条件毎に分けて検討し直しました。また、引用文献の巻末の表示、本文での引用表記も修正しました。まだまだ、まとまりがないかと思いますが、ご指導お願いします。」に対し、「前よりは出来ていると思うし、勉強もしているなと思います。ただ、まとめかたとして、文献研究なので、図表などはいらないと思います。自分でデータをとったのなら研究方法とか、結果・考察など必要ですが、人のデータなら、そんな書き方はしない方が良いでしょう。序章に問題意識(なぜそのような研究をするのか)、本論には笑いの効用と限界について、先人の研究をまとめていき、最後の結論で自分の意見を述べておくのです。そんなまとめ方をすると読みやすいと思うのですが、いかがでしょうか。いつか、松山に来られる時がありましたらどうぞお寄り下さいませ。」と返信した。

<2>「引用文献を減らし、要約しました。要約部分は、参考文献として表示しておく問題ないでしょうか。筆者の考察部分は最後のまとめに書きました。枚数がかなり減ってしまったため違った人の考えも加えたいと思うのですが、文献上引用されたものをこの研究でそのまま引用することは避けた方がいいでしょうか。(引用の引

用)質問ばかりですみません。ご指導お願いします。」に対し、「前よりは良くなっていますが、もう少し頑張りましょう。1. 要約は良いと思います。参考文献に入ります。2. 引用の引用を孫引きと言いますが、文献が手に入らない場合などを考えて孫引きをしてしまう場合があります。卒論程度ならやっても良いと思います。3. 心理学の学会誌をみて書き方をまねた方が良いかも知れません。4. 筆者の考察部分や提案を言いたいための先人の研究を読んだり、引用したりするので、そこにいたるまでに論理的に書かないといけないかと思えます。5. 節のところに名前(名字)がでていますが、その名前は取っても良いと思います。6. テーマ、目次の付け方を直さないといけないのですが、もう少し、内容をみてからにします。7. 今日はとりあえず、ここまでとします。9, 10月色々悩むかも知れませんが、みなさん、そこを通過して良い論文を書いているのです。数回で完成する人などいないと思います。お体にお気をつけてお励み下さい。」と返信した。

<3>「お世話になります。締め切りが近くなってきたのですが、まだまだ手直しが必要かと思えます。特に気になるところが、1. 第1章の先行研究はどれぐらいあげるべきですか。2. 孫引きは原書も表記されている場合は表記するべきですか。その他お気づきの点ご指導お願いします。」に対し、「ごくろうさまです。以前よりは良くなっていると思いますが、まだ直させて下さいね。1. 先行研究の数は決まっています。自分が論じたいことで参考になるものがあつたら上げて良いと思います。ただ枚数があるので、そこはうまく切り上げないといけないかと思えます。2. 原書もあるならあげても良いですが、枚数の関係で多くなるようだったら省いても良いです。3. テーマについては、もう少し内容が出来てから直します。4. 目次の先行研究の所に外人の名前があげられていますが、名前をあげずに、第1節のように表示規則とか、何か事柄をあげた方が良くかと思えます。別に外人の名前が重要という事ではないと思えますので。5. 「 」が長いような気がします。6. 所々、主語と述語のつながりが悪いところがあります。よく読んで直したら良いと思います。例えば、黒丸(2004)は、多い。7. ぽつりと句点がついているところがあつたりします。例えば、ここに私たちが笑顔をする理由。顔と

声ともに表現することができる感情。今日は以上です。お体をお大事にお励み下さい。」と返信した。

<4>「大変お世話になります。まだまだたくさん修正が必要だと思います。特に、1. 読んでいて分かりづらいところ、2. 全体的なバランスが気になります。その他お気づきの点ご指導お願いします。」に対し、「どうも有り難うございました。以前より、はるかによくなりました。自分で指摘したところ、私も気になりましたが、あとは、枚数や細かい所などの訂正などで大枠はそれで良いと思います。あと、もう少しですが、お体にお気をつけてお励み下さい。」と返信した。

<5>「いつもお世話になります。いくらか読みやすいように修正しましたが、まだまだ自分ではわかりにくいところがあるかもしれません。また、タイトルはこのままで大丈夫でしょうか。最終的に提出できるようその他ご指導お願いいたします。」に対し、「そろそろ仕上げの時期になってきたので、自分で良いと思ったら提出して下さい。1. テーマは「真の笑いと偽の笑いの違いと効果に関する研究」ではどうかと思います。2. 1のテーマに至るにはもっともっと練り直さないといけないのですが、時間がないので、勉強したことを披露するという形を取らざるを得ません。あるところで妥協しないと仕上がりにから、その辺でよろしいです。枚数や頁に関してはお任せします。3. 報告書概要の所で、特定分野にとらわれない、ということと、調査を行うことによって、ということ、気になりました。調査したのは〇〇さんではないので削ってもいいのではないかと思います。4. 要約の4行目、「あげている」は「取り上げている」としたらどうでしょう。5. 本文の中で、その結果のあとにカンマをしたらどうでしょう(3, 6, 15頁)。6. 10頁のちがうを漢字の違うにしたらどうでしょう。7. 18頁の「こんなふうに」を「以下のように」と論文口調にしたらどうでしょう。8. 25頁の今はいらなと思います。9. 21頁のレイテイ(2002)は文献の所では2003になっていますが、訳本だからですかね。10. 引用文献の13)と14)は本文中に見あたらなかったのですが、参考文献に入れた方がいいのですかね。11. 28頁の参考文献2)の年号ですが、引用文献にそろえて松田鉄訳(1996)「笑いと治癒力」と書いたらどうでしょう。12. 基本的には、〇〇さんの書き方や癖をそのまま活かした指

導なので、あまり直していません。〇〇さんの卒論ということでできるだけ自主性を重んじています。

14. 期限に間に合うように提出して下さい。お体を大切にお励み下さい。」と返信した。

以上、5回のメールのやりとりを通してまとめてみる。対象者は、筆者の返信に答えて徐々に論文らしく体裁を整えながらまとめていっている。しかし、問題意識の所で共通理解にズレがあり、結論に導くプロセスに緻密な論理性は感じられなかった。

効用としては、無駄話がなく、原稿そのものの訂正ができるので時間が短くてすむ。教員はきかいてきにメールを発信できるので煩わしさがなくなる。そして、努力のあとが手に取るようにわかってくる。

限界としては以下の通りである。問題意識の深まりがあまりなく、何のために誰のために研究をするのか、その研究は役立つかどうかなどの見通しなしに研究体制に入ってしまうと、あとで、やりなおしがきかなくなる。無駄話の中から、そして、表情をみながら、指導していく中で問題意識も深まり、わかることとそうでないこととの区別がはっきりするのではないだろうか。学生が伝えてくるニュアンスとそれに返信する教員のニュアンスがズレている場合、方向性が見えなくなってしまう。幸い、今回は、学生のやりたい方向性にいったので、学生自身はある程度満足しているであろう。教員にとっては学生ほどの満足はなかった。

結論として、仮説(1)(2)を支持するやりとりはみてとれた。

(参考文献)

佐藤公代の「大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連(1)～(10)」愛媛大学教育学部紀要と愛媛大学教育学部附属教育実践総合センター紀要を参照のこと。

